ゼミ・プロジェクト紹介

自らが考え、専門知識を深め、仲間と議論し、アイデアを形にし、広く発信することは大学での学びの醍醐味。専修大学生はゼミナール（ネットワーク情報学部はプロジェクト）を主な舞台に、高度な知識や技術の習得と研究成果のプレゼンテーション、社会への発信に励んでいる。その活躍と成果の一部をご紹介する。

「共に生きる　住工共生のまち」高津区紹介の小冊子作成

経済／遠山ゼミ

ものづくりのまちの歴史と、それに携わる人々の思いを知って――。

経済学部・遠山浩ゼミの3年次生が川崎市高津区の歴史や町工場の取り組みを紹介する小冊子「共に生きる　住工共生のまち」を作成、同区の内7区で2番目に多くなかでも同区下野毛、久地・宇奈根地区は準工業地域として1960年代から町工場が多数立地してきた。金属加工をはじめとして産業機械や高層エレベーターなどの部品製造で重要な位置を占める。「誇りと自信を持って高い水準のものを作り出している。すごい技術を持っている企業がいっぱいある」とゼミ生の高山裕里香さんは称賛する。一方で近年は戸建て住宅の建設が進み、工場と住宅が複雑に入り組んだ住工混在状況となり、昔ながらの町工場と新住民の融合が課題になっている。

遠山ゼミでは同区にある下野毛工業協同組合と川崎北工業会、サッカーJ1川崎フロンターレと共同で2012年11月「高津ものまちづくり会」を結成。工場を開放するオープンファクトリーやパネルでの町工場のホームゲームでのものづくりフェア、てくのまつり（川崎市生活文化会館）でのかわさき主催）で情報発信してきた。

「住民にとって大学生は〝お兄ちゃん・お姉ちゃん〟のような存在。文系学生として分かりやすい言葉で伝えることができる」と遠山教授は話す。

さまざまな取り組みを通じて、地域の人とのつながりも次第にできてきた。だがイベントに足を運ばない人には伝えることができない。そこで川崎市高津区役所から提案されたのが、冊子作成だった。

3年次ゼミ生11人が、2015年5月から冊子づくりに取り組んだ。これまでにも同会の活動に参加しており、素地は十分できている。さらにまちの歴史や住工混在問題などについてまとめるよう求める遠山教授の課題を基に、冊子の内容をつめていった。

表紙には25の事業所に勤める人々が、それぞれの会社のプレートを持ち笑顔を見せる。夏休み、ゼミ生が事業所を訪ね、撮影したものだ。

冊子はA4判8㌻。地域を発展させてきた町工場の先人の歩みと、同会の取り組みを紹介している。フルカラーで、印刷やレイアウトは同区に工場がある印刷会社が担当した。冊子づくりに奔走した鎌田健太郎さんは「思っていた以上の立派な冊子ができて感動した」と話す。

さらに「作っただけではだめ、見てもらわないと意味がない」と5千部作成したうちの3千部をゼミ生が手分けして下野毛、久地・宇奈根地区の住宅に配って回った。

ゼミ長の石崎直樹さんは「自分たちが学生の視点で活動できることに意味があると思う」と事業者と住民をつなぐ〝ジョイント〟役を目指す。

高津区役所企画課は「分かりやすくいい冊子を作ってもらった。今後も住工共生のまちとしてよい関係づくりを進めていきたい」としている。

▲ 制作に取り組んだゼミ生と小冊子

鎌倉の魅力伝えるプランで優秀賞

商／奥瀬ゼミ

▶ 48種類の地図作成を提案した早川さん、飯田さん、加藤さん（左から）＝2015年11月

鎌倉の魅力を若者の視点から伝えようと開催された鎌倉市まちづくりプランコンテストで商学部・奥瀬喜之ゼミの2年次生グループが優秀賞に選ばれた。「KMK48」と銘打ち、48種類の観光地図の作成を提案。その内容は癒しスポットからイケメン探訪など多岐にわたり、ユニークで自由な視点から古都の新たな魅力を浮かび上がらせようとしている。

コンテストは大学生や若者で組織する実行委員会主催、鎌倉市や同市観光協会などの後援で2回目。

加藤真応さんがたまたま見つけたコンテストへの参加を提案したのは2015年の秋、ゼミが始まって2週間目。締め切りまで1カ月を切っていた。鎌倉にはよく遊びに行くけれど、訪れるのはいつも同じ場所。どこに行っても混んでいるし、名所以外はよく分からない、既存のパンフレットは若者向けではないし、ネットでは情報が多すぎる――。

加藤さん、飯田萌さん、早川直毅さん、千葉誠さんのグループは、そんな実体験を踏まえ、地図を作ることで方向性はすぐに固まった。

語感から決めた「KMK48」だが、実際に48種類のアイデアを考案するのには苦労したという。自然や仏像など定番のものから、イケメンがいる寺や店、アイスクリーム店、ドラマケ地やアニメ聖地、さらにコンビニ、麺どころなど若者が興味を持ちそうなことを細かく拾い上げていった。実際に心霊スポットマップを作ってみた。

「ゼミに入ったばかりでまだマーケティングの理論を知らない学生ならではの自由な発想」と奥瀬教授は評する。

11月に大船観音寺で開催された決勝発表会には奥瀬ゼミ計3チームを含む5チームが選出された。

KMK48チームは「現地に行って好みに合った地図が手に入れば、行く度に新たな鎌倉の一面を発見でき、若者を呼び込むことができる」と提案。「48種類という発想が良かった」と審査員から評価され、松尾崇市長から優秀賞が贈られた。

4人は「これからも積極的にコンテストなどに参加して、さまざまなアイデアを出していきたい」と意欲をみせている。

▶ 活発な質疑応答が行われた

理系学生と共同研究

経営／渥美ゼミ

理工系の4大学の学生と連携し、スマートフォンの新しいアプリの企画・開発に取り組む経営学部・渥美幸雄ゼミが12月16日、生田キャンパスで成果発表会を行った。公立はこだて未来大学、神奈川工科大学、法政大学、長崎大学と合同の「ミライケータイプロジェクト」で、唯一の文系チームとしてビジネスモデルを練り上げた。

発表したのはプロジェクトリーダーの経沢優多さん、根岸佑太さん、内海洋樹さん、蒲生大貴さん、韓国人留学生の鄭洪旻さんの3年次生6人。5大学のアイデアから生まれた「車いすで快適に通行できる経路を案内するアプリ」と「観光地での感動コメントをその場にいる人が共有できるアプリ」の二つについて、開発意図や機能、収支計画などを説明。ソフトを開発した神奈川工科大学の学生も参加した。

メンバーは「自転車や

学生パワーで集落活性化

コメ加工品を開発、販売

経営／森本ゼミ

情報戦略をテーマにする経営学部の森本祥一ゼミ（ゼミ生27人）は、新潟県南魚沼市の辻又集落の活性化を目指し、同地域で取れた米を使った加工品の開発や販売を展開している。2年間にわたる活動は、今春『大学生と限界集落（仮）』としての調査・研究を受託した専修大学出版局から刊行されることになった。

▲ 辻又の人たちにインタビューする森本ゼミ生

▲ 辻又の水田を調査＝2015年8月

森本ゼミと辻又とのかかわりは、指導の森本准教授が新潟県から2014年度「大学生の力を活かした集落活性化事業」の調査・研究を受託したのがきっかけ。

辻又は15世帯・43人（15年5月現在）。中山間地域にある集落で、住人の半数以上が65歳以上と高齢化が進み〝限界集落〟と呼ばれているところ。過疎、高齢化により地域内の活動の担い手が不足している。

ゼミ生は「とにかく訪ねてみよう」と14年8月に初訪問、7日間の夏期合宿を行い、住民から聞き取り調査を始めた。上越新幹線浦佐駅から車で15分。辻又に着くと、辺りは田んぼと山、川のみ。廃校になった小学校を利用する自炊合宿となった。その後ほぼ毎月の訪問している。

特産は辻又産のコシヒカリ。冬の豪雪がもたらす良い水と寒暖の差でおいしい米ができる。「炊くと粒がしっかり立ち、甘みがあって炊きたてでも冷めてもうまい」と森本准教授は絶賛。ゼミ生もいとは思わなかった」と話す。

森本ゼミは「機能的な価値より感性的価値を訴えた方が効果がある」という森本准教授の分析から「辻又の良い環境で育てたコメ」というブランド戦略を打ち出した。15年8月に横浜で開催されたマルシェ（青空市場）に出店。専門店と協力しておにぎりにして70セットを販売したところ、終了2時間前に完売した。

フェイスブックを利用し辻又の宣伝に励み、神奈川県の小学校に呼ばれ、授業で辻又と限界集落についてゼミ生が話をしたこともある。また、辻又の里山に自生するミョウガを使ったたまり漬けおにぎりを考案。日本おにぎり協会のホームページに掲載され、こちらも好評だ。

当初、「遊びに来ただけの学生」という目で見ていた住民もいたが、ゼミ生の熱心な訪問が回を重ねることで、ゼミ生の訪問を楽しみにする人が増えた。家に呼びお茶を飲みながら話をし、一緒に辻又の人の悩みだ。

森本ゼミは辻又区長の佐藤真一さん（66）は「米は食べてみて良さがわかる。辻又の知名度を上げるための森本ゼミの皆さんの活動はありがたい。刺激もも。前辻又区長の佐藤真一さん（66）は「米は食べてみて良さがわかる。辻又の知名度を上げるための森本ゼミの皆さんの活動はありがたい。刺激されました」。次回のゼミ生訪問は2月末「雪まつり」が開かれる。

大嶋杏奈さん（経営4）は辻又を「夜になると真っ暗で何も見えなくなるんです。瞬く星と風の音、水の音だけ」と自分の故郷のように紹介してくれた。森本ゼミは辻又での活動を今後も続けていく。目下NPOと協力して休耕田を使ってのコメ作りを計画中だ。

初心者向け教材開発

首都圏の3高校が採用

ネット情報／プログラミング学ぶ8人

▲ プログラミング学習アプリを開発した学生たちと松永教授（奥）

▶ アプリを紹介するマンガ

初心者にも分かりやすく楽しいプログラミング学習を――。ネットワーク情報学部の4年次生がプログラミング学習用のウェブ教材を開発、実際に複数の高校の授業で使われ好評を得た。

初等・中等教育でのプログラミング教育が世界的潮流となるなか、日本でも注目が高まっている。そんななか、松本絵里子さん、中谷香凛さん、佐藤瑞帆さん、藤木諒斗さん、佐藤良樹さん、馬淵仁輝さん、鈴木博登さん、森美由紀さんの8人は3年次生のプロジェクト演習（指導・望月俊男准教授）に集い、開発に取り組んできた。

「1年次のプログラミング入門の授業が面白かったけれど、周りには好きじゃないという人がたくさんいた。せっかくの面白さを感じられないのはもったいない、なにかに興味をひくことはできないか」。こう語るのは松本さん。

そこで着手したのが「楽しく継続できるプログラミング学習アプリケーションの開発」だった。

「C言語を学ぼう!!怪盗Cから挑戦状」と題したアプリは5章構成で、「ストーリー進行」→「手本を見る」→「問題に挑戦」の3つの手順を繰り返すことで学習することができる。進行役はアニメ調のかわいらしい少年とネコで、中谷さんがデザインした。さらにプログラミングでは本来見えていないデータの動きも1行ずつキャラクター化した。中谷さんは「授業では、とにかく紙に書いて考えろと教わったが、それを自分なりにアニメ化した。ほかにはないアプリだと思います」と自信をみせる。

プログラミングの授業は苦手だったという佐藤良樹さんは自らの経験を踏まえ、「プログラミングはパソコンに命令する言葉」など分かりやすい言葉で伝えることに腐心した。

4年次生の卒業演習でもメンバーそのままで、引き続きアプリの改良に取り組んだ。「意見をぶつけ合い、合意して、作り上げていくことが楽しかった」と佐藤瑞帆さんは振り返る。

メンバーは企画書を作り、高校に提案。2年間で首都圏の3高から教材として採用された。この中から千葉県袖ヶ浦高校では普通科と情報コミュニケーション科の1年生約280人が正規授業で1カ月半使用。初心者も多かったが、ストーリー性とキャラクター性の高さから、物語の続きを見たいという気持ちで学習を進めることができた。

実際に高校に出向いて授業で指導も行った。鈴木さんは「基本的なパソコン操作を知らない生徒もいたので、分かりやすい指導を心掛けた」と話す。同高情報コミュニケーション科の眞山和姫教諭（平24ネット情報）は「大学内で完結せず、現場で活動しており頼もしい。今、プログラミングは重視されているので、この今後も取り組んでほしい」と話す。

4月からは全員違う道を歩み始める。卒業演習の指導にあたった松永賢次教授は「顧客のニーズを把握し、提案後も顧客の意見をフィードバックするという、社会では当たり前の経験を大学の時点でできたことは貴重」とメンバーの今後の活躍を期待する。

「江戸文化」などテーマに

文／板坂ゼミ　英大学とネット授業

▲ 発表する板坂ゼミ生。画面はSOASの学生

インターネットを用い海外の大学の日本学の教授や学生たちと授業を行う「ネット授業」が文学部日本文学文化学科で行われている。欧米やアジアの大学と専修大学の教室を「テレビ会議」システムでつないで展開する共同授業や遠隔授業で、板坂則子教授（江戸時代の文学文化）が中心となって進めている。12月に行われた「ネット授業」の様子を板坂ゼミ生の寄稿で紹介しよう。

◇

「ネット授業」は、日本文化に対する海外の学生の、自分たちとは異なる着眼点や認識を発見する貴重な場となっている。

12月8日にはイギリス・ロンドン大学SOAS（東洋アフリカ研究学院）のアンドリュー・ガーストル教授と学生6人と、板坂ゼミ生約40人がネット共同授業を行った。

日本時間は18時、ロンドンは同日の朝9時。SOASはヨーロッパにおける日本学研究の中心機関として知られている。

両大学の学生たちは日本語で、それぞれの作成したコンテンツを発表。SOASの学生たちの研究テーマは「洛中洛外図」や「現代女性作家に見る日本文学のアイデンティティ」、「日本語の正書法」など多彩だ。

対して板坂ゼミ生の発表テーマは『ヴェニスの商人』と『世間胸算用』、『銀河鉄道の夜』と『不思議の国のアリス』。イギリス文学との比較で日本文学の特徴を知ってもらおうという狙いで、プレゼンテーション動画を披露した。

それぞれの発表が終わった後は活発な意見が交わされた。「浮世絵に描かれる女性を美しいとは思われない。私たちにとっての美しい日本人像は歌舞伎の女形」というSOASの学生の意見には、洋の東西を問わない現代人の共通認識を感じた。「洛中洛外図などの日本美術は、西洋美術とは大きく異なる特徴を持っている。それを美しいと言っていただいてとてもうれしい」という声も上がった。

筆者には、同じ日本文化を愛し研究する者同士、心が通じ合った瞬間のように思われた。

（板坂ゼミ　K・H）

「SHOW」満10歳

文／川上ゼミ

▶ 第10号を手に笑顔のゼミ生たち

「SHOW、10歳になっている雑誌「SHOW」の第10号（A4判・112㌻）が12月に刊行された。角萌楓編集長（3年次）を中心に、2・3年次生23人が、企画・構成・取材・撮影・紙面製作・校正まで一連の作業に取り組んだ。

10号の節目を迎え、角編集長は「これまで同様、自分たちが興味を持っている社会問題を学生らしい切り口で取り上げました。先輩たちが積み上げてきた10年の重みを感じつつ、よりよいものを作ろうと奮闘したみんなの熱意が伝わったと思う」と、笑顔を見せた。

今号は、西荻窪・イスラム横丁・秋葉原・神保町などで生活する16人の生き方を問い直す『東京』と、セクシュアリティやジェンダーの問題から自分らしい生き方について考える『LGBT』の2つの特集記事を掲載。インタビューや座談会などで構成された『LGBT』は反響を呼び、東京新聞（川崎版1月23日付）にも取り上げられた。

巻末には、裏表紙から始まる『10周年記念企画』を掲載。第1号から第9号までの内容を振り返るほか、歴代編集長のメッセージも紹介する。

どの企画も読み応えは十分。レイアウトも細部までこだわっており、食品ロスを取り上げた『それ、MOTTAINAIじゃない？』といった記事や『世界の朝ごはん』『オタク解剖』などのコラム、日本語学科と日本文学文化学科のゼミや授業を紹介する『日語・日文コラボ』も面白い。

文学部生のほか、希望者にも配布する。

問い合わせはEメール（show10kawazemi@gmail.com）へ。